

《第 61 号》「里山のローカルウイズダム」の継承」

後藤 浩成(NPO法人グリーンコンシューマー東京ネット理事)

冬は森林の伐採シーズン。正月休みは連れといっしょに、隣地の山裾にある柿の大木(樹齢100年・樹高13mほど)の剪定をしました。実は秋になると落ちた柿を目当てにイノシシが集まり、家族が何度も怖い目に遭って来ました。そこで、木をくるめて、果実を先に収穫してしまおうという算段をたてました。

剪定といっても、なんせ大木。3m高の樹上で、バランスをとりながらチェーンソーで幹を切るのはとても危険！想像しただけで身が震える。枝振りを見ると、木の重心は倒したい向きとは逆方向。そこでロープとウインチで幹を引っ張りながら障害のない山側へ倒す方針を決定。まず投げ縄の要領で5m高あたりにロープを巻きつけ、立木にいくつかの滑車をかけ、ウインチは連れに引いてもらう準備をしていたところにです。

ご近所さんで里山暮らしの指南役でもある安道さん(85歳)が、膝の痛みをおして山道をあがって来ました。そして「ロープを8m高につけ直せ」の指示。確かに少し低いとは感じつつも、もうすぐ日没だし、8mを登る手間と危険度を考慮すると、さすがにちょっとためらってしまいました。しかし「つけ直せ」と一歩も譲らない。ついに連れも「うるさいなァ」と小声で抵抗をはじめる始末。(おいおい、おじさんは高性能の補聴器をつけてることをお忘れか?)とはいえ、無視するわけにもいかず、6mのはしごをかけて、こわごわ最上段へ、命綱もつけずに木の股まで上がり、ロープをかけ直しました。

次にチェーンソーの歯をいれる際は「通常より受け口の角度を広く」の指令。広めにつくったつもりでしたが、「木が裂けないようにもっと広く」の激。最後に追い口の歯をゆっくり入れて、伐倒は無事完了。指導のおかげをもって、ケガもなく裂けもせず、完璧な伐採ができました。「ロープがけの位置」「受け口の角度」等を樹種・周辺条件・手間をかけるべきところを見極めれば、人と木の両方が守れるのだと改めて合点がいました。現役時代は普通の会社勤めをされていた安道さん。退職されてから数年前まで、畑を耕し、山林の手入れをし、炭焼きもやっていた。聞けば子どもの頃から親や近所の手伝いに駆り出されて、技を覚えられたようだ。

「地球環境を破壊する国の大半は教育先進国。教育熱心になればなるほど持続不可能になっていく。この事実をどう捉えるのか」と、ある途上国の方がユネスコの国際会議で問題提起されたとか。そういえば、安道さんは「ウインチは息子にひいてもらえ。今、息子を呼べ」としつこかった。連れが当てにならないというわけではなく、受験勉強よりこの場面に立ち合わせるのが当たり前だったから自然に出た言葉だと思っています。

以上